

父の教えに聴く

箴言 3 • 12

一、テキストに聞く

1節、2節を見てまいります。
「わが子よ、私の教えを忘れるな。心に私の命令を保つようにせよ。／長い日々と、いのちと平安の年月が、あなたに増し加えられるからだ。」とあります。だれが、だれに、語ったことばだったのでしょうか。いくつか、考えられます。一つは、父親が子供に「わが子よ」と語ったという構図です。あるいは、律法の教師が「わが子よ、私の教えを忘れるな」と語ったという構図です。続く1節1行目元のテキストには「トーラー（律法）」と書かれています。すなわち、親が語った「教え」、律法の教師が語った「教え」、聖書が語る「教え」の根底にあるのは、トーラー（律法）です。ちなみに、私共にとつての「トーラー」はイエス・キリストの福音です。旧約の人々の、律法に対する思いが表れているのは、詩篇19篇です。〈詩編19・8～11（ラテン語訳）〉　いかがでしょうか。このことばが旧約の人々の「律法（トーラー）」に対する思いです。先ほど、「旧約の人々の『律法（トーラー）』に対する思い」は、私共の『キリストの福音』に対する思いと重なります」と申しましたが、い

かがでしようか。皆さま方の中に、いやながら神を信じ、キリストを信じている方はいるでしょうか。いないと思います。3章1節に戻りますが、1節2行目の「心に私の命令を保つよう」を指します。私共にとつては「キリストの福音」です。したがいまして1節は、常に聖書と、聖書の中心であるキリストのことを忘れず、それを考え続け、自分のものとしなさい、と言つ意味になります。2節を見てまいります。「長い日々といのちと平安の年月が、あなたに増し加えられるからだ。」とあります。神のみこころは、私たちの一人ひとりが健康で長生きし、平安に過ごすことであると思います——もちろん現実はなかなかそうなりませんが——。そのためには、神の御意志を知り、みこころを大切にして生きて行くことかと教えられます。3節、4節を見てまいります。

「恵みとまことがあなたを捨てないよう」にせよ。それをあなたの首に結び、心の板に書き記せ。／神と人の前に好意を得、聰明であれ。」とあります。「恵み（ヘセド）とまこと」は、旧約の人々の概念では、契約関係にある二者が誠実に、また真実を大切にして生きるという意味で、使われたことばであるとのことです。例えば、神である王と契約関係にあつたイスラエルは、「聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一で

ある。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」（申命記6・4～5）と語られました。私共の日常のことばに置き換えるなら「神と人の前に正直に生きるようにしなさい」になるかと思われます。4節を見てまいります。〈神と人の前に好意を得、聰明であれ。〉とあります。私共信仰者にとつて大切なのは、神の前にも、人の前にも、好意を得ること。且つ聰明であること、すなわち賢いこと、思慮深いことです。立派なことを語っている人に見えても、評判が悪い人であつたなら、どこかに問題があります。使徒の働き6章にあります、弟子の数が増えてきて、十二使徒だけでは回らなくなつた際、世話を役として七人を選ぶことにしました。十二使徒たちはこう語りました。「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御靈と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい」と。使徒ハウロも監督、すなわち教会のリーダーを選、ぶ際の条件として「また、教会の外の人々にも評判の良い人でなければなりません。」と語りました（一テモテ3・7a）。

ハムから始まる先祖であり、イスラエルの民に「父」として自身を現された神です。すなわち、イスラエルにおける「父」は、身近な存在でもあり、先祖でもあります。当然、良い意味で保守的になります。旧約聖書を読みますと、それぞれの時代の信仰者たちが、先祖の信仰者たちが語った何気無いことばでも——それは旧約聖書に書かれていることばです——、たいせつに扱っていることが見えてまいります。預言者が語ったことばも、神の靈に導かれて示されたことを語ったものの、律法（トーラー）に起源があることがほんどです。

二、父の教えに聴く

父とは、イスラエルの家庭における父であり、律法の教師であり、アブラ

7節、8節にありますように「自分を知惠のある者と考えるな。主を恐れ、悪から遠ざかれ。」それは、あなたのからだに癒やしとなり、あなたの骨に潤いとなる。」になります。